『隅田川』

― 上演詞章 ―

シテ　狂女
子方　梅若丸
ワキ　渡守
ワキヅレ　商人

所　隅田川畔（武蔵―船中―下総）
時　春
能柄　四番目物（狂女物）
作者　観世十郎元雅

詞章

1【名ノリ笛】

〈名ノリ〉
ワキ「これは東国隅田川の渡守にて候、さてもこの渡りは、武蔵下総両国の境に落つる川にて候ふが、この間の雨に水気に見えて候、大事の渡りにて候ふほどに、旅人の一人二人にては渡し申すまじく候、人々を相待ち渡さばやと存じ候

2【次第】

〈次第〉
ワキヅレ〽末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遥々の心かな
〈名ノリ〉
ワキヅレ「これは東国方の商人にて候、われこの間は都に候ひて、いろいろ商ひ事終り、ただいま本国にまかり下り候
〈上ゲ歌〉
ワキヅレ〽雲霞、あと遠山に越えなして、跡遠山に越えなして、幾関々の道すがら、国々過ぎて行く程に、ここぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く着きにけり、渡りに早く着きにけり
〈着キゼリフ〉
ワキヅレ「急ぎ候ふ程に、隅田川の渡りに着きて候、急ぎ舟に乗らうずるにて候

3

〈問答〉
ワキヅレ「いかに船頭殿、舟に乗らうずるにて候
ワキ「なかなかの事、舟に召され候へ、またあとより、人の多く来り候ふは何事にて候ふぞ
ワキヅレ「あれは昨日の泊りにありし女物狂にて候
ワキ「さあらばかれを待ち、舟に乗せうずるにて候、しばらくおん待ち候へ
ワキヅレ「心得申し候

4【一声】

〈サシ〉
シテ〽げにや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人に言伝てて、行方を何と尋ぬらん
〈一セイ〉
シテ〽聞くやいかに、上の空なる風だにも
地〽松に音する習ひあり

《カケリ》

〈一セイ〉
シテ〽真葛が原の露の世に
地〽身を怨みてや明け暮れん
〈サシ〉
シテ〽これは都北白河に、年経て住める女なるが、思はざるほかにひとり子を、人に商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の、関の東の国遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心乱れつつ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ねて迷ふなり
〈下ゲ歌〉
地〽千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを
〈上ゲ歌〉
地〽もとよりも、契り仮なる一つ世の、契り仮なる一つ世の、そのうちをだに添ひもせで、ここやかしこに親と子の、四鳥の別れこれなれや、尋ぬる心の果てやらん、武蔵の国と、下総の中にある、隅田川にも着きにけり、隅田川にも着きにけり

5

〈問答〉
シテ「のうのう、われをも舟に乗せてたまはり候へ
ワキ「汝は狂女ごさめれ、いづくよりいづ方へ下る人ぞ
シテ「これは都より人を尋ねて下る者にて候
ワキ「たとひ都の人なりとも、面白う狂へ狂はずは、この舟には乗せまじいにて候
シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乗れとこそ承はるべけれ、形の如くも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも、覚えぬ事な宣ひそよ
ワキ「狂女なれども都の人とて、名にし負ひたる優しさよ
シテ「のうその言葉はこなたも耳に留まるものを、かの業平もこの渡りにて〽名にし負はば、いざ言問はん都鳥、わが思ふ人は、ありやなしやと
〈掛ケ合〉
シテ「のう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり、あれをば何と申し候ふぞ
ワキ「あれこそ沖の鴎候ふよ
シテ「うたてやな浦にては千鳥とも言へ鴎とも言へ、などこの隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ
ワキ〽げにげに誤り申したり、名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで
シテ〽沖の鴎と夕波の
ワキ〽昔に帰る業平も
シテ〽ありやなしやと言問ひしも
ワキ〽都に人を思ひ妻
シテ〽わらはも東に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の
ワキ〽妻を忍び
シテ〽子を尋ぬるも
ワキ〽思ひは同じ
シテ〽恋路なれば
〈上ゲ歌〉
地〽われもまた、いざ言問はん都鳥、いざ言問はん都鳥、わが思ひ子は東路に、ありやなしやと、問へども問へども、答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とや言ひてまし、げにや舟競ふ、堀江の川の水際に、来居つつ鳴くは都鳥、それは難波江これはまた、隅田川の東まで、思へば限りなく、遠くも来ぬるものかな、さりとては渡守、舟こぞりて狭くとも、乗せさせ給へ渡守、さりとては乗せてたび給へ

現代語訳

1 渡守の登場

隅田川の渡守が舟を出そうとして、旅人がやってくるのを待っている。

渡守　わたくしは東国の隅田川の渡守です。この渡しは武蔵と下総両国の間を流れる川の渡しですが、このところの雨で水嵩が増しているようにみえます。渡河も危険なようすなので、旅人が一人か二人では舟は出せません。ともあれ、旅人を待つことにしよう。

2 商人の登場

商人が都から東国に帰る途次、隅田川に着く。

商人　行く先ははるか遠い東国なので、これから何日もかかるかと思うと、前途遼遠という思いです。
わたくしは東国の商人ですが、このところ在京していて、いろいろと商いをして、それが終わったので、ただいま本国に下るところです。
振り返ると、越えてきた山が遠く雲や霞の向こうにみえます。こうしていくつもの関を過ぎ、多くの国々を進んでくると、ここは、あの有名な隅田川で、その渡し場に早くも着いたことです。
急いだかいあって、はや隅田川の渡し場に着きました。急いで乗ろうと思います。

3 渡守、商人の応対

渡守は商人のあとから女物狂がやってくると聞いて、舟出を遅らせて女物狂を待つ。

商人　もうしもうし、船頭殿、その舟に乗りたいのですが。
渡守　承知いたしました。お乗りなさい。ところで、あなたのあとから多くの人がやってくるのは、何事ですか。
商人　あれは昨日の宿で泊りあわせた女物狂です。
渡守　それならあの女を待って、舟に乗せることにしよう。しばらくお待ちください。
商人　承知しました。

4 狂女の登場

狂女が子を思う親の心情を吐露しつつ、人買いに連れ去られたわが子を尋ねて、都から東国の隅田川にやってくる。

狂女　ある歌に、「人の親の心は闇ではないのだが、子ゆえに心の闇に迷うものだ」と詠まれていますが、その歌の意味をいまあらためて思い知らされています。この気持ちを道行く人に伝えて、わが子の行方を尋ねたいと思うのですが、しかし、それもどう尋ねればよいのかわかりません。
それにしても、わが子はこうして母が捜し歩いているのを知っているのでしょうか。心というものをもたない風でさえ松に訪れてきて音を立てるというのに、わが子はどうして風の便りさえもくれないのでしょうか。

《狂女はわが子を思って、狂乱のさまを示す》

狂女　この世は露のようにはかなく短いのに、わたくしはこうして、身の不運を恨んで、これからも毎日を過ごしてゆくのでしょうか。
わたくしは都の北白川に長年住んでいるものですが、思いがけず、たった一人の子を人買いに連れてゆかれてしまいました。連れてゆかれた場所は、逢坂の関の東で、それからさらに遠い東国とかに下ったと聞いてからというもの、心が乱れ、ともかくその東の方角とだけ思って、愛しいわが子の行方を尋ねて、こうしてさすらっているのです。
ある詩に、「親というものは千里も遠くに離れていても、子を忘れないものだ」と詠まれていますが、まさにそのとおりです。
もとより、親子の仲はこの世だけの仮のものですが、そのあいだでさえいっしょに暮らすこともできず、親子離れ離れになってしまいました。あの「四鳥の別れ」と言われる、鳥の親子の別離の悲しみというのは、まさにこのことだったのですね。こうして、わが子を思いつつ尋ねてきたその果てに、武蔵と下総のあいだを流れる隅田川に着きました。

5 狂女、渡守の応対

狂女は舟に乗ろうと、渡守と『伊勢物語』に描かれた業平や都鳥をふまえた問答を交わし、都の妻を思う業平の心情を自身のそれに重ねる。

狂女　もうしもうし、わたくしもその舟に乗せてくださいませ。
渡守　そなたは狂女ではないか。どこから来て、どこに行こうとしているのか。
狂女　わたくしは都から人を捜して下ってきた者です。
渡守　たとえ都人でも、面白く舞い狂ってみせよ。舞い狂わなければ、この舟に乗せることはできないぞ。
狂女　なにをおっしゃいます。隅田川の渡守なら、「日も暮れてきたから、舟に乗れ」と言うべきでしょう。わたくしはこれでも都人なのですから、「舟に乗せない」などとおっしゃるのは、隅田川の渡守とも思われません。そんな無粋なことをおっしゃるものではありません。
渡守　狂女ではあるが、さすがに都人で、「名にし負う」風雅な心をもっている。
狂女　おお、その「名にし負う」という言葉、それもわたくしには聞き捨てならぬ言葉です。あの業平もこの渡し場で、歌に、「名にし負はばいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」と、そう詠んでいるからです。
もうし、船頭殿、向こうに白い鳥が見えていますが、都では見馴れない鳥です。あれはなんという鳥ですか。
渡守　あれは沖の鷗だ。
狂女　また、なにをおっしゃいます。ここが海辺なら、千鳥と言っても鷗と言ってもかまいませんが、この隅田川で白い鳥といえば、それは都鳥です。どうして都鳥とお答えにならないのですか。
渡守　なるほど、言われるとおりだ。このような名所に住んではいますが、風雅を解する心がないので、それで都鳥と答えずに……。
狂女　沖の鷗だなどと答えたのですね。
渡守　そういえば、昔の業平もここで……。
狂女　ええ、「ありやなしや」と尋ねたのです。
渡守　それは都の妻を思ってのことでした。
狂女　その業平と同じように、このわたくしも東国で愛しいわが子の行方を尋ねているのです。
渡守　業平は妻をしのび。
狂女　わたくしは子を尋ねている。
渡守　どちらも、気持ちは同じです。
狂女　ええ、人を恋うるという点では同じです。そうであるなら、わたくしもあの業平のように、都鳥に尋ねてみましょう。わたくしの愛し子はこの東国に無事でいるのかどうか、と。しかし、いくら尋ねても、情けないことに、都鳥はなにも答えてくれません。意地の悪い都鳥です。そんな鳥なら、田舎鳥とでも言ってやりましょうか。
ある歌に、「舟の往来で賑わう堀江の川の岸辺に来て鳴く鳥がいるが、あれは都鳥だ」と詠まれていますが、それが本当の都鳥というものです。もっとも、そう詠まれているのは難波の川のことで、ここは東国の隅田川です。思えば、このうえなく遠くに来たものです。しかし、それはともかく、船頭殿、舟に乗る人が多くて、場所が狭くなっていても、どうか乗せてくださいませ。どうか、とにかく乗せてください。

（次頁へ続く）

6

〈問答〉
ワキ「かかる優しき狂女こそ候はね、急いで舟に乗り候へ、大事の渡りにてある間、かまひて船中にて物に狂ひ候ふな、最前の人舟に召され候へ
ワキヅレ「心得申し候、いかに船頭殿に申すべき事の候
ワキ「何事にて候ふぞ
ワキヅレ「向ひにあたつて念仏の音の聞こえ候ふは何事にて候ふぞ
ワキ「あれは人の弔ひに大念仏を申され候、あの念仏について、哀れなる物語の候ふを、この舟の向ひへ着かうずる間に、語つて聞かせ申し候ふべし
ワキヅレ「さらばおん物語り候へ
〈語リ〉
ワキ「さても、去年三月十五日、や、しかも今日にて候ひしよ、都の人とて年十歳ばかりなる幼き者を、人商人奥へ連れて下り候ふが、この人慣はぬ旅の疲れにや、路次よりもつてのほかに違例し、この川岸にひれ伏し候ひしを、のうなんぼう世には、不得心なる者の候ひけるぞ、今を限りと見えたる幼き人をば捨ておき、商人は奥へ下つて候、さりとも、さりともと思ひしかども、かの人たんだ弱りに弱り、すでに末期に及び候ふ程に、あまりに痛はしく存じ、故郷を尋ねて候へば、今は何をか包み参らせ候ふべき、われは都北白河に、吉田のなにがしと申しし人のただ一子にて候、わが名は梅若丸、生年十二歳になり候、父にはおくれ、母一人に添ひ参らせ候ふを、人商人これまで連れて下り候、われ空しくなりて候はば、この路次の土中に築き籠めて給はり候へ、それをいかにと申すに、まことは都の人の、足手影までも懐かしう候ふほどに、かやうに申し候、ただ返す返すも母上こそ、何よりもつて恋しく候へとて、弱りたる息の下にて、念仏四五遍唱へつひに終つて候、さる程に遺言に任せ墓所を構へ、標に柳を植ゑて候、今月今日が正命日に相当りて候ふ程に、所の人寄り集まり、大念仏を申され候、この船中にも、少々都の人もござ候ふごさめれ、あはれ大念仏をおん申しあつて、おん弔ひあれかし

6 渡守の物語

狂女は商人とともに舟に乗り、渡守が商人の質問に答えて、対岸で催されている大念仏にまつわる哀れな少年の物語を語るうちに、舟は対岸に着く。狂女は渡守の物語の途中から、その少年が梅若丸であることに気づく。

渡守　このような風雅な心をもった狂女は珍しい。急いで、舟にお乗りなさい。ここは難所ゆえ、船中ではぜったいに舞い狂ってはならぬぞ。さきほどのお方も舟にお乗りなされ。
商人　わかりました。ところで、船頭殿に尋ねたいことがあります。
渡守　何事ですか。
商人　あの向こう岸から念仏の声が聞こえてきますが、あれはなにごとですか。
渡守　あれはある人の弔いのための大念仏を行っているのです。あの念仏には、哀れな物語があります。この舟が向かいの岸に着くまでのあいだに、語ってお聞かせしましょう。
商人　それではお聞かせください。
渡守　昨年の三月十五日、しかも今日と同じ日のことです。人買いが都から年のほど十歳ほどの幼い者を連れて、陸奥へ下ろうとしていたのです。この幼い者は慣れない旅の疲れからか道中でたいへん具合が悪くなって、川岸に横たわっていたのですが、世の中にはなんと薄情な者もいることか、今を限りと思われたこの幼い者をそのまま見捨てて、商人は陸奥へ下ってしまったのです。その幼な子はなんとかがんばったものの、あっという間に衰弱して、もはや最期と思われた時に、土地の者があまりに痛わしく思って故郷を尋ねたところ、「今となっては、何を隠しましょう。わたくしは都北白川の吉田の何某と言った者の、たった一人の子ですが、梅若丸と申します。生年十二歳で、父には先立たれ、母とだけ暮らしておりましたが、人買いに連れさられてここまで一緒に下ってきたのです。わたしが空しくなったなら、この道中の土中に築きこめていただきたい。それはなぜかといえば、本当は都の人の足音や姿までも懐しく思われるので、このように申し上げるのです。しかし、かえすがえすも母上のことが何よりも恋しく思われます」と弱々しい息のもと、念仏を四、五遍唱えて、とうとう亡くなってしまいました。そこで、遺言にまかせて墓を作り、墓標に柳を植えたのです。今月の今日がちょうど命日にあたっているので。土地の人々が集って大念仏を行っています。この船中にも、少々都の人もいらっしゃるようですが、なんとか大念仏を唱えて弔っていただきたい。おや、長物語をしているうちに、舟が着いた。さあ、はやく舟から上がられよ。
商人　ただ今のおん物語に落涙いたした。先を急いでいますが、念仏に加わろうと思います。
渡守　わたくしからもそのことを伝えておきましょう。
商人　承知しました。

7 狂女、渡守の応対

狂女は舟から下りず、渡守にいま聞いた哀れな少年の物語について、その時期、少年の年齢、少年の名前をひとつずつ聞き返して、それがわが子梅若丸のことであるのを確かめる。渡守は悲嘆に沈む狂女を舟から下ろして、梅若丸の墓に案内する。

渡守　これこれ、そこの狂女よ。舟が着いた。急いで上がりなさい。ああ、やさしい心の持ち主だ。いまの話を聞いて、落涙しているのだな。さあ、急いで舟からお上がりなさい。
狂女　もうし、船頭殿。いまのお話はいつのことでしょうか。
渡守　去年三月のちょうど今日のことです。
狂女　で、その少年の年齢は。
渡守　十二歳でした。
狂女　その子の名は。
渡守　梅若丸。
狂女　父の名字は。
渡守　吉田の何某。
狂女　そののちは、親も尋ねてこなかったのですね。
渡守　そうです。親類も尋ねてはこなかった。
狂女　まして、母などは尋ねてこなかったのですね。

〈問答〉
ワキ「や、長物語に舟が着きて候、急いでおん上がり候へ
ワキヅレ「ただ今のおん物語りに落涙仕りて候、末は急ぎにて候へども、われらも念仏の人数に参り候ふべし
ワキ「こなたより時節を申さうずるにて候
ワキヅレ「心得申し候

7

〈問答〉
ワキ「いかに狂女、舟が着きて候ふ、とうとう上がり候へ、あら優しや、今の物語を聞き候ひて、落涙し候ふよ、とうとう上がり候へ
シテ「のう舟人、今の物語はいつの事にて候ふぞ
ワキ「去年三月十五日、しかも今日に当りて候
シテ「さてその児の年は
ワキ「十二歳
シテ「主の名は
ワキ「梅若丸
シテ「父の名字は
ワキ「吉田のなにがし
シテ「さてその後は親とても尋ねず
ワキ「親類とても尋ね来ず
シテ「まして母とても尋ねぬよのう
ワキ「いや思ひも寄らぬ事
シテ「のう親類とても親とても、尋ねぬこそ理なれ、その幼き者こそ、この物狂が尋ぬる子にてはさむらへとよ、のうこれは夢かやあらあさましや候
ワキ「言語道断、さてはその人の母にておん入り候ふか、今は嘆きてもかひあるまじ、かの人の墓所を見せ申し候べし、こなたへ渡り候へ

8

〈問答〉
ワキ「のうのうこれこそかの人の墓所にて候へ、よくよくおん弔ひ候へ
〈クドキ〉
シテ「今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今はこの世に亡き跡の、標ばかりを見る事よ、さても無慚や死の縁として、生所を去つて東の果ての、道のほとりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや
地「さりとては人々、この土を返していま一度、この世の姿を、母に見せさせ給へや
〈上ゲ歌〉
地「残りても、かひあるべきは空しくて、かひあるべきは空しくて、あるはかひなき等木の、見えつ隠れつ面影の、定めなき世の習ひ、人間愁ひの花盛り、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲覆へり、げに目の前の憂世かな、げに目の前の憂世かな

8 狂女の慨嘆

狂女は梅若丸が眠っている塚の前で手で土を掘り返そうとするなどして慟哭し、身をもって体験する世の無常に呆然とする。

渡守　もちろんです。
狂女　ああ、親類も親もこれまで尋ねてこなかったのは当然です。その幼い者こそ、この狂乱したわたくしが捜している子なのですから。これは夢だろうか。ああ、なんということか。
渡守　これは驚いた。それではその子の母でいらっしゃったのか。今となっては嘆いてもしかたありません。その者の墓をお見せしましょう。こちらへおいでなさい。

8 狂女、渡守の慨嘆

渡守　さて、これが亡き人の墓です。ねんごろに、お弔いなされよ。
狂女　いままでは、ひょっとしたら逢えるかもしれないという期待をもって、見知らぬ地である東国に下ってきたのですが、いまは、こうして亡くなったわが子の墓標だけを見ることになってしまいました。それにしても不憫なことです。「人はどこで死ぬかわからないもの」などと言われますが、わが子は生まれ故郷から遠く離れた東国の果ての、路傍の土となって、春の草だけが生い茂っている、この土の下に眠っているのですね。
人々よ、どうかこの土を掘り返して、もう一度、生前の姿を母に見させてくださいませ。
生きているべき者が亡くなって、生きていても意味のないこの母親が生き残ってしまいました。この母の目には、ぼんやりと、わが子の面影が浮かんだり消えたりしています。
このように老少不定なのがこの世の習わしなのです。たとえば、花の盛りが人の憂いの種なのは、花にはかならず無常の象徴ともいうべき嵐が吹きつけるからです。また、迷いという心の闇を照らしてくれる月の光も、この世の定めなさを象徴する雲に隠れてしまうのです。そのようなこの世の不定を、いま、まさに眼前にしているのです。

9

〈掛ケ合〉
ワキ「すでに月出で川風も、はや更け過ぐる夜念仏の、時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らし勧むれば
シテ「母はあまりの悲しさに、念仏をさへ申さずして、ただひれ伏して泣き居たり
ワキ「うたてや人々多くとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれと、鉦鼓を母に参らすれば
シテ「わが子のためと聞けばげに、この身も梟鐘を取り上げて
ワキ「嘆きを止め声澄むや
シテ「月の夜念仏もろともに
ワキ「心は西へと一筋に
シテ、ワキ「南無や西方極楽世界、三十六万億、同号同名阿弥陀仏
地「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏
シテ「隅田川原の、波風も声立て添へて
地「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏
シテ「名にし負はば、都鳥も音を添へて、
地、子方「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

9 狂女、渡守の念仏

狂女が渡守に勧められて、鉦鼓を撞木で打って渡守とともに念仏を唱えると、隅田川の波風もそれに唱和するなか、梅若丸の念仏の声が聞こえる。

渡守　はや月も出て、川風も吹いて、夜も更け、夜念仏にふさわしい時刻になった。
そこで、人々が鉦鼓を打ち鳴らして、念仏を勧めたところ、母はあまりの悲しさに、念仏さえ唱えられずに、ただ、ひれ伏して泣くばかりだった。
渡守　ああ、気の毒なことだ。多くの人が弔うより、母御が弔われるのを、亡者もさぞ喜ばれることでしょう。
渡守はそう言って、鉦鼓を母に渡した。
狂女　わが子のためというのは、もっともです。それでは、わたくしも不肖の身ではありますが、鉦鼓を持って、嘆くのをやめて、声を澄ませ、この月下、ただ一筋に西方極楽浄土を思って、人々とともに夜念仏を唱えることにしましょう。
狂女、渡守　南無や西方極楽世界、三十六万億、同号同名阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏
狂女　この称名に、隅田川原の波風も声を添えています。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、また、「名にし負はば」と歌に詠まれた都鳥も声を添えています。
狂女、渡守、梅若　南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

（次頁へ続く）

10

〈問答〉

シテ「のうのう今の念仏の中に、まさしくわが子の声の聞こえ候、この塚の内にてありげに候ふよ

ワキ「われらもさやうに覚えて候、所詮こなたの念仏をば止め候ふべし、母御一人おん申し候へ

シテ〽いま一声こそ聞かまほしけれ

〈歌〉

シテ〽南無阿弥陀仏

子方〽南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と

地〽声のうちより、幻に見えければ

シテ〽あれはわが子か

子方〽母にてましますかと

地〽たがひに手に手を取り交はせば、また消え消えとなり行けば、いよいよ思ひは真澄鏡、面影も幻も、見えつ隠れつする程に、東雲の空もほのぼのと、明け行けば跡絶えて、わが子と見えしは塚の上の、草茫々としてただ、標ばかりの浅茅が原と、なるこそ哀れなりけれ、なるこそ哀れけなりけれ

10　終曲

狂女は梅若丸の声をもう一度聞こうと、こんどは狂女一人だけで念仏を唱えると、塚の内から梅若丸の念仏の声が聞こえ、狂女の幻覚に梅若丸が現われる。狂女は幻の梅若丸と手を取りあったりするが、梅若丸は塚に戻ってしまう。やがて夜も明けてきて、そこには塚の草だけが残っているのだった。

狂女　もうしもうし、いまの念仏のうちに、確かにわが子の声が聞こえました。この塚のなかからのようです。

渡守　わたくしたちもそのように聞きました。ともあれ、われわれの念仏を止めることにしよう。母御一人でお唱えなさい。

狂女　ええ、もう一度声を聞きたいと思います。南無阿弥陀仏。

梅若　南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

と、幼な子の声が聞こえたかと思うと、幻のようにその姿が見えたので、「あれはわが子か」「母上でいらっしゃいますか」と、たがいに手と手をとりあうと、こんどはまた、消えかかるようすに見えたので、母の思いはいよいよ増すばかりだった。そうして、幻の幼な子の姿も、見えたり、見えなくなったりするうちに、東の空もほのぼのと明けてきて、幼な子の姿は見えなくなってしまった。幼な子と見えたのは、じつは塚の上の草であって、あたりは、その墓標の草だけが茫々と生えている茅原だったのは、なんとも哀れなことだった。

『隅田川』鑑賞のために ― 詞章・現代語訳についてのメモ

◆演出の都合により詞章に省略・異同がある場合がございます。

◆この『隅田川』の詞章は観世流なので、シテと地謡の詞章は観世流ですが、ワキとワキヅレの詞章は下掛り宝生流、アイの詞章は和泉流のものに拠っています。

◆【名ノリ笛】【次第】【一声】は人物の登場楽（出囃子）です。

◆詞章冒頭の〈上ゲ歌〉〈一セイ〉〈サシ〉〈問答〉などは、当該箇所の曲節の名称です。

◆詞章で〽が付された箇所は韻文のフシ（節）、「が付された箇所は散文のコトバ（詞）です。

◆掛詞と認められる箇所にはもうひとつの意味を左肩に漢字で小さく記しています。

◆詞章に「地」とされている部分は、戯曲上は大別して、

①シテのセリフ

②ワキのセリフ

③叙事文（小説で言えば「地の文」）

の三種があるので、現代語訳にさいしては、そのいずれか判断して訳しています。

また、③叙事文の箇所の現代語訳は二字下げにしてあります。

「北白河」の発音について

北白河（北白川）は春秋座がある地域ですが、その地名を今回の上演では、シテはキタシラカワと言い、ワキとワキヅレはキタジラカワと言っています。これはシテが観世流で、ワキとワキヅレが金春系の下掛り宝生流であることに拠っています。とすれば、どちらが本来の発音かということになりますが、これはキタジラカワだったと思われます。なお、単に「白河」の場合はもちろんシラカワです。